



旅から旅絵

第七七回

藤原成暁

原風景としての多摩川 私のスケッチノートから一

画家を志してデッサンに励んでいた頃、「毎日描き続けて現状維持、休んだら腕は落ちる」と脅かされた。やがて画家から建築家に方向転換し美大に入学した私は、恩師保坂陽一郎先生から「身の丈ほどにスケッチを重ねよ」と教えられた。さらに「歩け、そして自分の眼で見よ」と宮本常一先生の薫陶を受け、まずは実際の建築に触れてスケッチすることから始めた。B6判の白紙のノートを「スケッチノート」と称して持ち歩いた。絵の上手下手は二の次、とにかく手を動かす行為に主眼を置き、構えずに素直に感じたままにアウトプットするスケッチ中心のフィールドノートである。

今回その中から、田舎のない私にとって、幼少の頃から自然を感じていた「多摩川」をモチーフに選んだ。小学生の頃は早朝から友人と魚釣りに行ったり、多感な思春期には一人イーゼルを下げて日がな一日絵を描いて過ごす場所になった。対岸に家々が建ち並ぶ水平に続く横長のアングルが好きで、たびたびその光景を描いた。

日が傾くと各家庭で夕餉の支度が始まる。日常の当たり前の風景に感動し、心に平安を感じて帰途につく。その風景は今も眼に焼き付いている。中央の一枚はその頃を思い出しながら描いた心象風景である。



ふじわら・なりあき

1953年東京都生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業後、奥野建築設計事務所を経て鬼頭梓に師事。1990年藤原成暁設計室設立。現在、同設計室主宰。ものづくり大学名誉教授

旅のスケッチ募集

「旅から旅絵」では、会員の皆さまの旅のスケッチを募集します。
問い合わせ・送付先／編集担当宛て

kaishi-2@kenchikushikai.or.jp